

国際学術誌での研究発表について： 個人的経験から

岡崎哲二
東京大学

出発点

- 1990年代までの研究発表のスタイル
 - 国内学会誌への投稿
 - 「1920年代の鉄鋼政策と日本鉄鋼業：製鉄合同問題を中心として」(『土地制度史学』1984)
 - 「1930年代前半の日本鉄鋼業と製鉄合同」(『経営史学』1985)等
 - 大学紀要への寄稿
 - 「第二次世界大戦期の日本における戦時計画経済の構造と運行：鉄鋼部門を中心として」(『社会科学研究』1988)
 - 「戦後経済復興期の金融システムと日本銀行融資斡旋」(『経済学論集』1996)等
 - 邦文での研究書の刊行(単著、編著)
 - 『日本の工業化と鉄鋼部門－経済発展の比較制度分析』(東京大学出版会、1993)
 - 『現代日本経済システムの源流』(日本経済新聞社、1993)等
 - 邦文・英文の研究書への寄稿
 - 「銑鉄共同組合」(橋本寿朗・武田晴人編『両大戦間期日本のカルテル』東京大学出版会、1985)
 - “Relationship between Government and Firm in the Post WWII Economic Recovery,” in M. Aoki, M. Okuno-Fujiwara and H. Kim eds. *The Role of Government in East Asian Development: Comparative Institutional Analysis*, New York, Oxford University Press, 1996, etc.
 - 国内・海外の学会・コンファレンス等での口頭発表
 - 社会経済史学会、土地制度史学会、経営史学会
 - World Economic History Congress, 世界銀行主催のコンファレンス等

出発点(続き)

- 社会的活動

- 政府・民間の審議会・研究会
- 社史・団体史・官庁史
 - 『通商産業政策史』(通商産業調査会、1992)
 - 『戦後日本経済と経済同友会』(岩波書店、1996)
- 一般向け書籍の刊行(新書等)
 - 『江戸の市場経済－歴史制度分析』(講談社、1999)
 - 『持株会社の歴史－財閥と企業統治』(講談社、1999)
- 講演

- 変化への動機

- 現状に安住することへの不満足感
- 国内学会誌の問題点
 - Double-blind の論文審査体制が採られていない
 - 日本の経済史・経営史分野における研究者社会の広さの限界

国際学術誌という選択肢

- 東京大学経済学部^の他分野の同僚から受けた影響
 - ミクロ経済学・マクロ経済学研究者の研究発表スタイルと研究者評価の基準
- 経済学のコンセプト・分析枠組みに基づく経済史という研究スタイル
 - 経済学の知的資産を歴史研究に生かしたいという学部学生時代以来のモチベーション
 - 経済学研究者との共同研究の経験
 - 『経済理論への歴史的パースペクティブ』(東京大学出版会、1990)
 - 『取引制度の経済史』、『生産組織の経済史』(東京大学出版会、2001、2005)
- 投稿の経験(他分野の研究者からの誘い)
 - “The Japanese firm under the wartime planned economy,” *Journal of the Japanese and International Economies*, vol. 7, 1993
 - “The Performance of Development Banks: Case of RFB and JDB” (with K. Ueda), *Journal of the Japanese and International Economies*, vol.9, 1995

国際学術誌という選択肢(続き)

- スタンフォード大学での講義経験(2002-2003年)によって与えられたモチベーション
 - 客員教授と客員研究員の相違
- Double-blindの論文審査体制と研究者社会の広さ

初期に投稿・発表した論文

- “The Role of Merchant Coalition in Pre-modern Japanese Economic Development,” *Explorations in Economic History*, 42: 184-201, 2005
- “Measuring the Extent and Implications of Director Interlocking in Prewar Japanese Banking Industry,” (with Michiru Sawada and Kazuki Yokoyama) *Journal of Economic History*, 65(4), 1082-1115, 2005
- “‘Voice’ and ‘Exit’ in Japanese Firms during the Second World War: *Sanpo* Revisited,” *Economic History Review*, 59(2): 374-395, 2006

国際学術誌に投稿・発表して感じたこと

- Double-blindの論文審査システムで論文の評価を受けることの効果
 - 専門性の高いレフリーからの厳格で有益なコメント
 - 高いreject率
 - 謙虚さと向上心
 - レフリー・レポートの直接送付により、エディターの判断の妥当性を担保
- 論文を発表することの効果
 - 経済学その他分野の研究者(国内・国外)からの評価
 - 経済史学界における国際的評価
- 英語でのディスカッション能力の向上

国際学術誌での研究発表のために必要なこと

- 研究内容の充実・向上
 - 歴史に関するinsight
 - 経済学のコンセプトと分析枠組み
 - 計量分析
- 国際的な研究動向・文献の広く深い理解
- プレゼンテーション能力
 - 特にイントロダクションの書き方

→優れた論文を多く読むこと

- 強い忍耐力とコミュニケーション能力
 - エディター、レフリーとの対話

日本の若い世代の研究者にとって低下しつつある障壁

- 経験と能力のある指導者・研究者の増加
- 海外の学会・コンファレンス等に出席する機会の増加
- 技術進歩
 - 英文ワード・プロセッサー
 - インターネット
 - 電子ジャーナル
- 英文校正費用の低下